

幼馴染みと志摩リン

力力才天下

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ソロキヤン少女こと志摩リンとヘタレ幼馴染みがラブコメする話。

野クルメンバーもでます。

目

次

本栖湖

本栖湖（リン目線）

本巣高校

麓キャンプ場

（間話）星流ゆう

もやりん

82 72 53 36 16 1

本栖湖

——11月中旬。プロ野球も高校野球（対外試合はできるけど）もキャンプもオフシーズンに入る季節。

そんな時期に俺こと星流ほしながしゅう ゆうは寒空の中、本栖湖のキャンプ場に陣を張っていた。
湖畔の先に見える雲の傘を被つた富士山からは、暖かさをあまり感じない太陽が半端に顔を出している。

小さな背もたれのついた組立椅子は、男子高校生の身体を預けるには少々心もとなく思えるが、これが意外に問題なく座れる。軽くて丈夫、さすがは made in Japan。

イヤホンから聴こえてくる地元東海ラジオ放送は、ドラフトで指名された有望選手のインタビューを流していた。

東海は地元じゃない？ ファンが地元って言えば地元に入るから（暴論）。

ピュウ～と風切り音が聞こえると、後ろのテントが揺れる。気温は10度以下、かなり寒い。しかし、野球部で鍛えた身体に、貼るほつかりとコートを着込めばあら不思

議とばかり寒さに耐えられるのだ。

と、自分の身体の丈夫さを空に自慢していると、携帯がバイブした。
画面にはラインの着信。

名前はリンと映されていた。幼馴染みで同級生の志磨リンだ。

リン 『ゆう、ちょっとといいか?』

ホシ 『どした? 起きたら体が縮んでたか?』

リン 『謎の組織に毒薬盛られた経験はない』

ホシ 『それ以上小さくなつたら困るしね(笑)』

リン 『ぶつころ』

ぶつころと送られて来るのは、ちょっと怒っている時の合図だ。

ちなみに本気で怒つたら、既読スルーされる。ちょっと傷つく。

これ以上へそを曲げられると洒落にならないので、用件を聞いた。

ホシ 『それでどうした?』

リン 『寒い』

ホシ 『そりやあこの時期ですから。ここはオーストラリアじゃないよ』

オーストラリアは季節が逆なので今が夏。海をかけるサンタクロースなどが有名である。

リン 『焚き火がしたい。薪を拾つてきてくれ』

ホシ 『自分で行けよ』

わりと素で返信した。すると一分もしないうちに。

リン 『……寒い』

『凍え死にそうだ』

『ああ、斎藤。今私もそちらに逝くぞ（———）』

ホシ 『帰つてこい』

『あと、斎藤さんはまだ死んでないから。ご存命だ』

それにあの人寒いの苦手だから、多分凍死はしないだろ。

リン 『本気でほしい』

『お願いします優様m（———）m。テントの立て方とか教えた恩を返すと思つて……』

『その恩は買い物付き合つたり、キャンプ道具運んだりして、返してる気がするがな』

ホシ リン 『ふつふつふ。あの程度じや、まだ利息分も返せてないぜ』

ホシ 『なん……だと……?』

『くつ、元より俺の身体だけが目当てだつたんだな』

リン 『その通りだぜ』

『大人しく言うことを聞きな』

ホシ 『俺の身体は自由にできても、心まで自由にできると思うなよ』

『くつころー!』

と茶番をしつつ。

ホシ『まあ、ちよつと退屈してたしいいよ』

『ついでに夕飯の材料も持つてくわ』

リン 『サンキュー』

返事が来たのを確認する。

俺は、夕飯の材料が入つたりユツクを担いでリンがテントを張つて いる拠点まで向かつた。

◇

リンの拠点に到着した。

少し年季の入つた吊り下げ式のテントが張られている。

その側にプランケットにくるまり口元まで隠してミノムシのようになつている少女がいた。からうじで見える見覚えのある防寒の帽子。リンである。

この様子だと相当寒いらしい。でなきや、普段服が臭くなるとかでやりたがらないのに、焚き火をするなんて言わないか。

リンは口元を隠したまま。

「くつくつくつ、よく来たな小僧」

「お前が呼び出したんだろ……。まあ、いつか。たしか乾燥してる枝を選べばいいんだつけ？」

中二病なノリはスルー。おそらく斎藤さんとラインをしていたのだろう。あの人もけつこうノリがあつち系だからな。

レジャーシートを引きながらりんに確認する。そのまま、シートに材料が入つたリュックを置く。重石と荷物置きで一石二鳥だ。

「うん。あと、松ぼっくりもお願ひ」

松ぼっくりは火種として使えるらしい。面白い形をした動物の餌の実くらいの認識しかなかつたから、最初教えてもらつたときは驚いたものだ。

俺は了承する。そして枝 or 松ぼつくりを拾うために木々の方に入つていった。
一一一五分くらい経ち。俺は、戦利品を持ち帰つて来た。
地面に広げると、カラソカラソと音をたてて転がる。

その光景をみたりんは、眉をひそめながら一言。

「……拾いすぎだろ」

「いやあ 拾つてたら段々楽しくなつちやつて……つい」

どうせ拾い放題だし、と思い調子に乗つたのが悪かつた。

もちろん他に利用客もいないし、松ぼつくりも枝もまだまだ大量に落ちている。

だが、焚き火するには多すぎる。明らかに使いきれない。集めたのに使わないかもしれないのは、少々罪悪感があつた。

なので、責められると少しへこむ。

「まあ、頼んだのは私だし。これ以上は言わないでおく」

「サンキュー」

さすがは幼馴染み。

小さい頃（リンは今でも小さいが）にお風呂に一緒に入つていただけあって、俺のこ

とをよく理解しておられる（関係ない）。

閑話。

リンは、焚き火を起こす準備を始めた。てきぱきと段取りを進める姿には憧れを覚える。俺は、まだキャンプはビギナーなので焚き火のやり方などは勉強中だ。

そうしてあつという間に火が起こつていた。この鼻を刺す独特な匂いにはまだ慣れない。服に移りそうで、少し火に当たることに拒否感を覚える。しかし、それ以上に温度の誘惑。……抗えなかつた。

俺は火に手をかざす。冷えきつっていた指の先に血がめぐるような感覚を覚えた。

「あ、暖かい」

「これだから焚き火はやめられねえぜ」

俺の向かいで火に当たつているりんも満足そうに呟いた。

「なんか焚き火見ると焼き芋食べたくなるな」

「おいやめろ。想像したら食べたくなるだろ。責任とつて買つてこい」

「どこでだよ……。一番近いスーパーでも、チャリで30分かかるぞ。寒い寒い坂の中、チャリを押して買つてくるのか？　お前は俺を殺す気か」

「だよね……」

リンはあつさりと諦める。元から冗談のようだ。まあ、そんな理不尽な命令するやつ

と何年も友達できないうけど。

だが、リンは未練がましい目で焚き火を見つめている。いまだに焼き芋の幻想に苦しめられているようだ。

仕方ない。

「少し早いが夕食作るか。リンもお腹減ってるみたいだし」

「わ、私を腹ペコキヤラみたいに言うな！」

そんなつもりはなかつたんだが。女心は纖細で複雑である。

俺はリュックを開ける。中から取り出したのは漆器色の鍋。Amazonで注文して3000円と少しとお手頃価格。それにリンに聞いたところけつこう性能がいいものらしい。

そして更にネギ、白菜、人参（一口大に切つてある）、豆腐、肉団子が総括して入つたビニール袋、そして出汁が入つたペットボトルを取り出した。

「今日は何を作るんだ？」

「へつへつへ。お嬢ちゃんが大好きなあれだよ」

「あ、あれだと……まさかつ！」

「そうさ——」

——ちゃんこ鍋だ』

若干不満げに睨まれた。

……別に大食いとかけたわけではないのだが。



火にかけていた鍋の蓋がカタカタと揺れ始めた。湯だつた合図である。

あちつ、あちつ、と悶えながら蓋を取る。すると中には入れた具材たちがグツグツと音を立てていた。

今日作つたのは鶏と塩ちゃんこの素をベースにした自己流ちゃんこ鍋。

鶏ガラスープの旨味を凝縮した匂いが風に運ばれる。

ごくりと唾を飲み込む音が向かいから聞こえた。まあ、そう慌てるでない。と待てをされている犬のようになつたリンに心の中で語りかける。

お玉を鍋に沈めて、味見用の小さな皿にスープを移す。

そして一口啜る。うん、俺的にはちよどいい。だが、今日は一人ではなく一人鍋。相手の舌の意見も聞かなくてはならない。

ほいつと、リンに小皿を渡す。リンは何の疑問もなくステップを口にした。

「味どうかな？ こんなもんか？」

「うん。ちょうどいいよ」

「オッケー」

口に合つたようで何よりだ。

確認が取れたので、俺は2つ取り分け皿に具材を注ぎリンに1つ手渡した。準備はすべて完了だ。

「ではっ」

「いただきます」

手を合わせて、食材に感謝を捧げた。

まず始めに箸が捕まえたのは、熱されてくつたくたになつた白菜。持ち上げると染み込んでいた汁がだくだと滴り落ちる。

こんなの、うまくないわけがない。

人参は旬野菜だけあつて甘味がとても強い。一口かじるだけで、口の中に入れらしい甘味が広がる。

こんなの、うまくないわ……etc。

そしてメインディッシュ。肉団子。しかも今回はスーパーで買ったような量産

品ではない。肉屋のおばちゃんに頼んで特別に作つてもらつた、いわばオーダーメイドオオオ肉団子。そんじよそこのらの肉団子とは違うのだよ。

少々割高ではあるが、それを損に感じさせない。

いざ、実食……俺は肉団子を口に運んだ。

その瞬間口の中が幸福感に満たされた。シンプルなスープが肉の本来の旨味を引き立てる。更に噛むごとに旨味が出てくる。時おり軟骨のこりつという感触がアクセントになっていて、これがまた堪らない。

気がつけば夢中で鍋をほうばつていた。

「ふうう。食つた食つた」

「うん、すつごく美味しかつた」

「本当は締めにほうとう入れるつもりだつたけど、入る？」

「無理、お腹いっぱい。私少食だし」

最後の言葉に変な意地を感じた。まだ氣にしているらしい。

「まあ、出汁はまだあるから。ほうとうは明日の朝食べよう

「分かつた……でも時間あるかな？」

「朝10時までだろ？ 余裕余裕」

「ゆうは朝練で早起きに慣れてるだろうけどさ……」

「起きてなかつたら起こすよ。冷水ぶしゃーでいいか?」

「凍死するわ」

俺のジヨークにリンの静かななつっこみが入つたところに、携帯のバイブ音が響いた。

俺の携帯ではないから、リンの携帯だろう。

「誰から?」

「斎藤。さつき、ちゃんこ鍋の写真送つたから、その返事みたい」

「へえ、何て返つてきたん?」

そう聞くとリンはライン画面を見せてくる。

斎藤 『ちゃんこ鍋かゝ、おいしそうだね〜』

『ゆう君今度は私にも作つてよ』

リン 『いいよ。だが、高くつくぜ b y ゆう』

斎藤 『10円くらい?』

リン 『そのくらいでいいよ』

安すぎるだろ。うまい棒1本分の価値しかないのか、俺の鍋。

斎藤 『ちなみに私は今日炒飯だつたよ〜』

『美味しかったよ（＊、▽、）』

しかし、送られてきた画像は炒飯ではなく、愛くるしい瞳をしたチワワが上目使いしている写真だった。

たしか斎藤さんが飼っている犬だ。名前はチクワ。

リン『……!?』

『貴様チクワを食べたのか？』

文面は驚いているが、リンは真顔だ。どうやら斎藤さんの間違えを弄っているようだ。

斎藤『あ、間違えた』

『本物はこっちね』

と、次に送られてきた画像にはおいしそうな炒飯とピースしている斎藤さんが写つていた。

どうやら小さな命は犠牲にならなかつたようだ。一安心。

リンは平然としている斎藤さんの返信に少し悔しそうだつた。
まあ、いつも弄られてるからね。髪とか色々。

斎藤『じゃあ私そろそろ寝るね～』

リン『はや!?』

現在6時半を少し過ぎたぐらい。寝るにはかなり早い時間だ。

斎藤『氣を使つてるんだよ』

『あまり、デートの邪魔するのは不粋だからね』

リン『デートじゃねえよ』

『変なこと言うな』

斎藤『はいはい、二人は同じ場所でソロキヤンしてるだけだもんね』

『じゃあ、頑張つてねリン～』

リン『何をだよ』

本当にナニをだよ。

いや、まあね。俺とて健全な男子高校生。夜に仲のいい男子と女子が人気のない場所で二人つきりという状況に、色々と妄想を働くかせてしまうこともある。

しかもリンはわりと押しに弱いから、好感度的には小さい頃から一緒の俺ならワーナンチヤンあるだろう……いや、だからワーナンチヤンあるだろうじやねえよ！
とんでもない爆弾を落としてくれたもんだな斎藤さん！　おかげでさつきまでそんなムード1つもなかつたのに気まずくなつてるじやないか！

俺は頭を抱えながら、今ごろ俺たちの狼狽ぶりを想像してにやにやしているだろう斎

藤さんに呪詛を送る。

リンはリンで空気が変わったことを察したのか、顔を赤くして困ったように茂みの方を見ていた。

その姿は明確に拒否もしないし、誘うわけではないから、選択肢に困る。

どう言えば正解なんだ。どうすれば……ツツ！

……俺は悩むのはやめた。

「……リン」

「な、何？」

「俺、テントに戻るわ」

「……あ、うん。鍋ごちそうさま」

「おう。何かあつたら呼べよ。それじゃあ

俺は逃げた。全速力でテントまで走った。

だつて、恥ずかしいんだよおオオオ！

その後斎藤さんに文句のメツセージを送つたら、ヘタレと罵られよけいにへこむのは別の話。

本栖湖（リン目線）

ビューという冷氣を運ぶ風が襲うと、私は身を震わせた。

カイロは3枚マニユアル通り血管の多いところに貼り、頭には防寒用の帽子、厚い上着を着て膝にはブランケットをかけている。しかし、本栖湖の冷氣はそんな努力を嘲笑うかのように私を凍えさせる。

この寒さだけは、いつまで経つても慣れない。

それでも私は冬キャンプが好きだ。普通キャンプと言えば夏というイメージだから、そう言うと人には不思議がられる（あんまり人と関わらないけど）。

でも、冬キャンプは汗をかきにくいし、虫もいないし、何より人がいないから静かだ。それにゆうが暇な時期だから誘いやすい。

ゆうとは私の幼馴染みの星流 ゆう。

野球部に所属していて、いつもグラウンドで一番声を出して、汗を流して、チームを引っ張つて、友達がたくさんいて……私とは正反対の人間だ。幼馴染みでもなければ、絶対に関わらなかつた人種だ。

別に劣等感とかは感じない。私は好きで一人でいるし、ゆうも好きで人と一緒にい

る。

でも、ゆうにキャンプ場を紹介すると嬉しそうに行くと言つてくれるは何だか優越感みたいなものを感じる。人気者を一人占めしているみたいな感覚なのだろうか？

そんなだから、唯一の女友達の斎藤からは、ゆうとの関係を勘ぐられたりもする。でも、誰が何と言おうが私とゆうは幼馴染みとしか言えない。

私は今誰かと付き合おうとは考えていないし、ゆうも部活に忙しくてそんな余裕はないと言つていた。

多分、今はこの距離感がちょうどいいのだろう。

二人で同じ場所でキャンプをして、それぞれマイペースに過ごして感想を言い合う。そんな中途半端な関係が好きなんだと思う。

センチメンタルなことを考えながら空を見上げた時、またもや風が私を襲つてきた。「寒つ……！」

前言撤回。持ちつ持たれつ、人は助け合うべきだ。

私はブランケットで口元までくるむ。

そしてその中でゆうに向かつてメッセージを送った。



その後は前話の通り、ゆうに薪拾いを頼んでご飯作つてもらひ斎藤のせいで気まずくなつて逃げられた。

……正直びつくりした。あんな真剣な表情で名前を呼んでくるから、私も覺悟を決めなくてはならないのかと思つた。
ドキドキと心臓の音がうるさい。もう鍋の余韻なんてとっくに冷めているのに、顔が熱い。

ゆうの顔も真つ赤だつた。多分私が考えていた、いやもしかしたら私よりも進んだことを考えていたのかもしれない。

うう……。こんな予定ではなかつた。変な意識はせずに、ただキャンプを楽しむつもりだつたのに。

これも斎藤のせいだ。あいつが余計なことを言わなければ。
その時、携帯がバイブした。

画面には、憎き斎藤が表示されていた。

斎藤『リン。あの後どうなつた？』

リン『くあwせdrftgyふじこ1pツツツ！』

斎藤『おー、荒ぶつてるね』

リン『あります前田』

『当たり前だ!』

たんだぞ!』

斎藤『ごめんごめん』

『お前があんなメッセージ送つてくるから、あの後めちゃくちゃ気まずくなつ

りん『反省してる?』

斎藤『謝るけど、反省はしない』

リン『いやしろよ』

まあ、この間にメッセージを送つてきてるつてことは、斎藤は大方の予想はついていたのだろう。

ぐぬぬ……。手の平で転がされたみたいで悔しい。

斎藤『リンもしかして今、ああ、明日ゆうとどんな顔して会えばいいんだ……つて悩んでる?』

リン『何で分かるんだよ。エスパーか?』

斎藤『ククク、貴様の考えなどすべてお見通しだ』

リン『なん……だと……!?』

斎藤『冗談だけどね。リンの考えることは大体読めるよ』

リン『むぐぐ……。それはそれで嫌だな』

斎藤『細かいことは気にしない。そんなことよりもどうするの？ ゆう君のこと』

リン『どうするも何も……』

斎藤『私にいい考えがあるよ』

斎藤のいい考え方とやらに嫌な予感しかしない。携帯を弄りながらにやにやと楽しんでいる姿が目に浮かぶからだ。

しかし、このままと言うわけにはいかない。朝にはゆうと顔を会わせるのだ。どうにかしなければならない。

私は期待半分、不安半分で文字を打った。

リン『どんな？』

斎藤『まずゆう君のテントに侵入して……』

文面を読んでいる途中だつたが、私はアプリを閉じた。

そして通知機能をオフにして、テントの中に入つた。

……しばらくやつのLINEは無視する。

そう決意した。



「あちやー、本気で怒っちゃったか」

既読とついたままメッセージが返つてこない。明らかに無視だ。同時にそれはリンクの機嫌を損ねたことを意味する。

やらかしたー」と言いたげに斎藤恵那は、手で口元を触る。

自室のベッドに寝転がりながら、口をすぼめて反省する。直接的すぎた、次はもつと遠回しに誘導するようにな……と怒らせた内容でなく、やり方について反省していた。懲りていらない。

この斎藤恵那はのほほんとしているが世話を焼き気質な一面も持っている。その本能が働いたのか、友人カップル（仮）に行きすぎていることを承知ではつぱをかけたのだが、案の定怒らせてしまった。

しかし、言い訳もさせてほしい。

あの二人は普段から一緒にいる。家が近いからゆうの朝練がなければ登校はいつも一緒に、午後の練習がなければ帰るのも一緒。昼休みも斎藤を含め三人で昼食を食べ、よくお弁当のおかずを交換したりしている（相手の箸で）。しかも買い物に行つた、キヤン

プに行つたとプライベートでの話もよく報告を聞く。

それでもリンとゆうは、付き合っていないという。
ふざけるな。

いつもイチャイチャを目の前で見せつけられ、聞かされる身にもなつてほしい。
どう見ても両想いなんだから、はよお前ら付き合えと思つてしまふのも当然の帰結と言える。

「何はどうあれ、男女の意識がないわけじゃないことが分かつただけ収穫かな」

機嫌良さそうに足をパタパタと動かす。

幼馴染み故にお互い異性として意識が低いのではないかと疑つていたが、その線はないことは今日で証明された。

「さて、次はどうしようかなあ……」

にこにこと楽しそうに、斎藤恵那は、次の手を思案するのだつた。



ぶるるると不意に寒気を感じ、私は身を震わせた。

風もないし、スープのおかげで身体は暖まっているはずなのに……何か悪いことが起こる前触れ？

ないな。多分気のせいだ。気のせいに決まつてた。

私は無理矢理自分を納得させた。

スープを飲みすぎたのか、トイレに行きたくなつた。

時間のせいかトイレに行く道は、真っ暗だつた。……少し恐い。

ゆうに付いてきてもらおうかと携帯を取り出した時に、今私とゆうの関係は微妙になつていることを思い出した。がくりと力なく首を折つた。

くう、大丈夫。暗闇なんて怖くない、怖くないと思えば怖くないんだ。

私は道を照らす灯りを持つて茂みに入つていつた。

——散々警戒していたが、終わつてみるとあつけない。

用を足した私は、来た道を戻る。道に慣れたのか行きよりも幾分か心が楽になつていた。

やはり幽霊なんて迷信なんだ……なんてフラグを立てるようなことを考えたのがいけなかつた。

——ガサガサガサツツ！

「……ツツ!? な、何だ」

突然茂みが揺れ始めた。背後から聞こえてきた不意打ちに、私は心臓を掴まれたようにひゅうとなつた。

茂みをならした物体は、私に気がついたのか枝を踏む音が近づいてくる。冷や汗が流れる。恐怖心のせいか足がガクガクと震える。

何だ？ 野性動物？ それとも幽……靈……？

ガサリと輪郭を現した生物？ に灯りを当てる。するとそこに見えたのは——

——顔がぐつちやぐちやになつている化物だった。

私は、灯りを放棄して脱兎のごとく走り出した。

「待つでよおおおおお!!!」

しかし、化物は私を追いかけてくる。くつ、捕まえて私を食べる気か！

恐い。すつごく恐い。

……ゆう！ 助けてゆう！

「置いてかないで！ 一人にしないでよおおおおお！」

追いかけてきているのが化物でなく、私が放つておいたやつだと気がつくのは、私が自分の拠点に逃げ込んだ時だった。



「ひつぐ、ひつぐ……」

「はい、スープ。暖まるよ」

「うん、ありがとう」

目元を赤くしピンク髪の少女は、スープを啜った。

鼻水がずるずる出ていて明らかに寒そうに見えたから、これだけでもかなり違うはずだ。

でもそれだけじゃ、夜の湖畔の寒さは防げない。

案の定少女は、へつくし！とくしゃみした。仕方ない。私は、余っていた貼るホツカイロを差し出した。

「よかつたらこれ使う？ 少しはましになると思うよ」

「ありがとう！」

「あと、足の裏とか血管が多いところに貼ると暖かくなるよ」

「へえ～！ そなんだ。すごい、博識なんだね！」

何の裏もなく褒められると、何だか照れ臭さを感じる。

悪い気はしないけど。

こいつがなぜこんな時間にあんなところにいたのかと言うと、1000円札にもなっている本栖湖の富士山を見に来たのはいいが、疲れて休憩所で寝てしまい、気がつくと辺りは真っ暗。しかも最近買った携帯も忘れ途方にくれていた。そんなとき近くに通りかかった私にすがつたといのが事の顛末だ。

「……バカだ。私は、理由も含めて呆れた。

でも、面倒という理由で放つておいたのも私だから少し罪悪感があった。

「よかつたら私の携帯使う？ 自分の携帯にかければ」

「自分の番号を覚えておりません！」

警察官の敬礼のようなポーズをとつて堂々と言い張った。

「……じゃあ、家の電話番号」

「引っ越したばかりで分かりません！」

「……」

詰んだ。どうすんだよ。

私は頭を抱えた。そんなときだつた。

「――ん!!」

夜空に響く男の声。

驚いたのか向かいの少女は、ひつ！と短く悲鳴をあげる。

私だつてあの声の主を知つてゐるから、ある意味悲鳴をあげたい。

「はあ……はあ……。リン！どうした、何があつた!?」

「う、宇宙飛行士いいいい！」

「うわあ！だ、誰だお前、カー○イ!?」

「どどどどどどどうするの！宇宙飛行士の幽霊だよ！感動だけどこわいよ！」

人型シユラフに身を包んだ気まずい幼馴染みに、顔を恐怖に染めた迷子が私に助けを求めてくる……カオスだ。



何とか混乱を収めた私は、ゆうには今の状況を、少女にはゆうの素性を話した。

「何というか……チャレンジャードナ。引っ越した当日にチャリでここまで来るか普通？」

「というとはゆうの感想。私はだよねと共に感した。

「いやあ、それほどでも！」

少女はなぜか照れ臭そうにしていた。いや、褒めてねえよ。

「そんでどうするんだお前。ここから一人で帰るのか？」

「無理無理無理！ あんな暗い道一人で帰るなんて、絶対無理！ こわい！」

「そうか。ん、送つてくつて言いたいところだけど、さすがに南部町はなく。遠すぎるからきついなあ」

ゆうは頭を抱える。

「ここから南部町まで40キロはある。軽々しく送つていくと言える距離ではない。というかこいつ、よくそんなところから来たな。

「最悪私のテントに一日泊めて朝に帰らせれば」

「でも、親御さん絶対心配してるだろ。自分の娘が帰つてこないんだから。……はあ、連絡さえとれねばな」

「うう、ごめんな（ぐー）……さい」

能天気な腹の音が辺りに響いた。

まあ、最初に見かけた時間からしてお昼ごはんも食べていないのだろう。お腹が減るのは仕方ない。それにしても最悪のタイミングだつた。まるで反省していないようと思えるからだ。

少女は、あわあわと何とか取り繕うとしている。

だが、ゆうは怒っていない。むしろ笑っていた。

「……ふふふ、そこで腹鳴らすか。タイミング絶妙すぎるだろ」

「え？　え？」

たしかに、私も真剣に考えるのが巴からしくなるほど力の抜けた音だった。
ゆうは立ち上がり、少女を見て言つた。

「何か食べるか？」

「え？　でも、いいの？」

「腹減つてんだろ？　腹が減つてもいい案はでないつて。それにシリアルスな雰囲気のときには鳴られても困るからな」

ゆうは軽く皮肉るように言つた。意地が悪い。

「うう……。じゃ、じゃあお願ひします」

「オツケー。んじや、ちょっと材料取つてくるわ」

——少ししてゆうはリュックを持って戻ってきた。料理するためかシユラフは脱いでいた。

コンロの上に鍋を置いた。

そこにさつき使つたちやんこ鍋のだし汁の余りを入れる。

そこにはうとうの麺を入れ、火を付ける。

「麺の下茹ではしなくていいの？」

「ほうとう麺は下茹でしないよ」

「そ、う、なん、だ、く、！」

疑問を聞いてきたので、私が答えた。たしか讃岐うどんとかは下茹でが必要らしい。私たちはこれが当たり前なんだけどな。

「ついでに言うと、ほうとうは南瓜ほうとうつて言うくらい南瓜を入れろつて言われるけど、実は南瓜を入れる明確な理由はないんだ。実際、今から作るのも南瓜なしのほうとうだしな」

「へえ、おいしそう！」

楽しみだなあ、と歌うように言つている姿はとても無邪気に見えた。見た目は同い年ぐらいだけど、実は中学生？ 年下なのか？

鍋の中が煮だつてきた。そろそろ仕上げに入る。

「ふふ、ほうとうと言えばこいつよ。山梨名物、甲州味噌！」

「おおおおお～！」

「……」

必殺技を繰り出すようなテンションのゆう。

少女は、パチパチパチと拍手して囁し立てる。私は茶番についていけず呆気にとられていた。

「ほら、リン！ ノリが悪いぞ！」

「私にそのノリを求めるな」

「リンちゃん、恥ずかしながらいで！ さあ！」

「やらねえよ」

「どうか、リンちゃんつていつのまに名前で。まあ、苗字教えてないけど。それにしてもコミュ力高いな。」

ゆうはスプーンを使って味噌を鍋の中に入れた。

おたまを使って、味噌を溶かす。スープの色が見慣れた味噌色に変わった。
そしてゆうはリュックから卵を取り出す。

「よし、ラストはこいつを乗せれば完成だ」

そうして卵を割って、黄身だけを鍋に入れた。

「できたよ。星流ゆう作、南瓜なしのなんちやつてほうとう！」

「おおおお～！ おいしそう！」

味噌の甘辛い香りが鼻孔を刺激する。食べてもいないのに、おいしいと直感させた。

「では、いただきます！」

少女は、食材に感謝を捧げる。

割り箸を割つて、鍋にそのまま入れだ。麺をズるズると啜る。

「うわあ～、麺もつちもちだ！ すづごくおいしい！」

幸せそうに破顔する。

次はステップを啜つた。

「すご～いまろやかだね～。いつも食べてるお味噌汁とは全然違う！」

「まあ、それはやまごみそつて言つて有名なほうとうのお店が使つてる味噌だから。味噌汁よりほうとうに合わせて作られてる味噌なんだ」

「うわあ～すごい！ 本格的だあ～」

「ゆうは、食事には拘るからね」

「当たり前だ。食事はすべての基本だからな。リンだつて食事のせいでそんな小学生みたいな身体に……」

「おい、ケンカ売つてんのか？」

「そうだよゆう君。小学生はかわいそうだよ。リンちゃんは中学生だもんね」

「ちげえよ、高校生だよ」

「ええー!?」

「何でゆうまで驚いてんだよ。お前は知つてるだろ」

「おう、おちよくつた」

親指をたてて爽やかに言つた。

「ぶつころ」

「いひやいいひやいいひやい！」

とてもムカついたので、ほつぺたを力一杯引っ張つてやつた。



エピローグというか今回のおち。

「あ……そういうえば、お姉ちゃんの番号なら覚えてた！」

というなでしこの言葉をきっかけに、話はどんどん拍子に進んだ。

その後、なでしこのお姉さんが車で迎えに来た。……すごく怒られてたけど、あれは心配していた証拠だ。多分、メイビー。

そのお姉さんからは、お詫びと言われ大量のキウイをもらつた。私は嫌いではないが、すっぱいものが苦手なゆうは少しひきつた顔をしていた。

ちなみになぜ私がなでしこの名前を知っているのかというと、帰り際に名前と電話番号（番号はお姉さんに聞いたらしい）が書かれた紙を渡されたからだ。

それを渡すとなでしこは「またキャンプしようね！」と言つて帰つていつた。

残されたゆうと私。

「まあ、登録ぐらいはしてやるか」

「俺もしておこう。女の子からの番号なんて貴重だし」

「……変態」

「男なら正常だつて」

開き直った様子に呆れてしまう。

私がラインのアプリを開くと、ゆうから山のような着信とメッセージがあつた。
ぎよつとした。

「ああそうだ。お前何で電話出ないんだよ。お前から、意味わかんないメッセージが来てて、何かあつたんじやないかつてすごい心配したんだぞ」

「メッセージ？ ……あ」

そういうえば、なでしこに追われているときにゆうにメッセージを送つた気がする。正直必死に逃げてて、内容は覚えてないけど。しかも斎藤の着信を表示しないために設定してたから、ゆうからの着信にもまつたく気がつかなかつた。

心配させてしまつたらしい。

「ごめん」

「まあ、無事だつたからいいけどさ。ちゃんと電話にはでろよ？ 俺お前に何かあつたら泣くからな」

「う、うん。分かった」

そんな恥ずかしい台詞、面と向かって言うなよ。頬がとても熱くなつた。

不気味なほど静かな夜に穏やかな風が木々を揺らす。

暗いのは苦手だが、熱を冷ますためにそんな森を散歩したくなつてしまつた。

本巣高校

H.R.前の空き時間、厚いコートが手放せない教室に続々と登校してきたクラスメイトが入ってくる。

俺はその10分前から椅子に座っている。野球部の朝練があったのだ（グラウンドが凍つていて、体育館で行つたが）。そのため危なかった、ギリギリ間に合つたなんて声が聞こえてくると、軽い優越感を感じる。

ふはは、走れ愚民ども。

「何にやついてんの？」

男の声が聞こえた。

声の方を見ると、同じ野球部のハルノブが立っていた。山梨県のハルノブだと、歌舞伎では顔だけいいダメ男でお馴染みのあの人を連想してしまう。まあ、ハルノブの顔は童顔なので、かつこいいより可愛い系なのだが。

「この世界を救う方法を思い付いた」

「話でかあ!?」

「嘘だ。どうやつたら授業中寝てもばれないか思い付いた」

「それは役に立つけど、話の落差がひどい！」

「ちなみに方法としては、先生を挑発して、怒った先生が殴る方法をスマフォで撮影して拡散すれば授業が中止になつて寝てもばれない。よしやろう……」

「大炎上おおお!?」

「……ハルノブが」

「俺!? 俺がやるの!?」

「ハルノブ、俺たち友達だよな」

ハルノブの肩にぽんと手を置く。

「やだよ！ そんな歪んだ友情いらないから！」

「冗談だけど」

「当たり前だよ!?」

暴力ダメ、SNSの使い方には気を付けて。

リンの冷静で一刀両断するようなつっこみとは違い、ハルノブは熱いギヤクマンガの

ようなつっこみだ。

にやついていた理由を隠すためにボケたが、反応がおもしろくてつい繋げてしまつた。

からかわれたのが分かつたのか、ハルノブは口惜しそうに唇を噛んでいた。
だが、それもいつものこと。ハルノブは諦めたようにため息を付いた。

そして思い出したように話題をふつてきた。

「そういえば、昨日のキャンプどうだった?」

「色々あつたよ」

「へえ、色々か……」

「今工口いこと考えたな」

「かかかか、考えてねーし!　俺みたいな純情野球少年は、そういうのよくわかんねえから!」

……電波系のアイドルみたいなキャラ付けしてんなこいつ。

「はいはい。酔つたお姉さんに逆レされる工口漫画買ってたハルノブ君、マジ純情野球少年」

「何でそれを知っている!」

「とある情報筋からな」

だつて、その本買つた本屋リンがバイトしてる店だし。接客したのは店長（白髪のおじいさん）だし、多分こいつは客の生徒に見られていいなか必死に警戒していたから、店員は盲点だつたのだろう。リンはばつちり見ていた。田舎だとエロ本買うのにも（社会的な）命がけだ。

「そ、それはもういい！ それよりも何があつたんだよ！ 色々つて言うからには少しは進展したんだろうな！」

ハルノブはやけくそ気味に叫んで、ビシツと俺を指差す。

「進展な……」

「なかつたのか？」

「一緒に晩ご飯食べて、朝起きないリンを叩き起こして、朝飯食つたくらいだね」

「なんだいつも通りじゃん」

はあゝと深いため息をつかれた。まるでお前にはガツカリだと言われんばかりのため息だつた。

どんな報告を期待していたんだか。まあ、だいたい想像はつくが。こいつの思考回路斎藤さんと似たり寄つたりだから。どこが純情なんたか。

「あと迷子を保護したな」

「まさかの新情報。え？ 迷子って夜のキャンプ場で？」

「ピンク髪で、食いしん坊で、俺の作つたほうとうを三杯食い尽くしたよ」

「カ一〇イじyan」

「言葉尻にペポと付けてた」

「〇ービイそのものじyan！ 嘘つけ！」

怒鳴るハルノブに呼応するように、HRが開始するチャイムが鳴った。

真面目なハルノブは、俺を追求しながら俺の1つ後ろの席に座る。

「ペポくは嘘だけど、それ以外は本当だよ」

「やつぱりそこは嘘かよ！」

「お前ら静かにしろ。HR始めるぞ」

「ほら先生も怒つてるよ」

「むぐぐ……」

先生を出されては黙るしかない。ハルノブは納得してなさそうにしながらも渋々黙つた。

「そうそう、今日はHRを始める前に転校生を紹介する」

へえ、転校生が来るのか。

すぐに冬休みに入るこの時期に転校とは、何かしら訳ありかね。親の仕事の都合とか。

そんな他人事のように見ていると、先生の呼び掛けに転校生がガラリとドアを開けて入ってきた。

転校生は女の子のようだ。犬山さんや斎藤さんなんか可愛い女子が多いこの学校だが、容姿では勝らぬとも劣らずかなり可愛い。これは野郎が色めきだつた。

髪の毛はピンク色……ピンク？ はて、つい最近そんな人物と遭遇したような……。記憶を思い起こしていると、転校生が自己紹介を始めた。

「浜松の方から来ました、各務原 なでしこです！ よろしくお願ひ……」
刹那、転校生と俺の目があつた。

「ああああああ！ ほうとうの人だ！」

そのなでしこのさした指はしっかりと俺を捉えていた。
クラスがざわめきたつ。

——おいおいまじかよ。

こうして俺は先日助けた迷子と再会することになった。



あの後は大変だつた。

なぜなでしこと知り合いなのか、出会いはどうだつたのか、二人はどんな関係なのか、リンとは別れたのか等々後半はちよつとなに言つてゐるのかわからなかつたが、ともかく疲れた。

「向こうがグラウンドな。図書室は1階、後は体育館と部室棟は少し離れたところにあるよ」

別にいきなりひとりでに自分の学校を紹介し始めたわけじやない。

俺の隣で「わあー！」と窓の外を眺めて目を輝かせてゐるなでしこに言つてゐるのだ。なぜなら、なでしこと俺が知り合いと言ふことで担任から彼女のサポート役に指名されてしまつたからだ。

もちろん、男どもからは呪詛を女の子たちからは黄色い声援を浴びた。中には「昼ドラ」や「泥沼三角関係」なんて不吉な言葉が聞こえてきたけど、気のせいだと思いたい。そんなわけで俺は放課後の時間を使って、なでしこに校内をしているのだ。

本当なら今日は部活が休みだから、図書室で時間潰してリンと一緒に帰ろうかと思つていたのだが、そう思い通りにないかないようだ。

外の景色に満足したのか、なでしこは嬉しそうな顔をして戻ってきた。

「ねえ、ゆう君。この学校にキャンプする部活つてないのかな？」

「キャンプ？ キャンプしたいの？」

「うん！ この前見た富士山が忘れられなくて」

「ああ」

元々なでしこがあんなところまで来たのも富士山を見るためだつた。それに夜の富士山は、キャンプをしなければなかなか見れないだろう。まあ、若いキャンパーが増えるのは悪いことじゃない。むしろ歓迎すべきだろう。

「あと、あの時食べたほうとうの味が忘れられなくて」

実はそつちが本命では？

頬を触りながらだらしない顔をしているなでしこを見ていると、そう思つてしまつた。



『野外活動サークル』——通称野クル。

野外活動というと登山や釣りなんかも範囲になるのだが、部長の大垣さんいわくキャンプがしたくて作った部活らしい。

人数は二人でまだ正式な部活ではない。聞いてる話だとまだまともにキャンプをしたことないみたいだから、初心者のなでしこにはちょうどいい環境だろう。

そう思い、野クルの部室まで来てみたのだが、中には誰もいなかつた（一応ノックはした）。

「狭いね」

「そうだね」

「うなぎの寝床みたい」

浜松市民らしい感想だつた。

物置にもならなそうな幅で、奥行きがそれをかろうじでフォローしているような部室だ。部室の吊り看板がなければ、とても部室とは考えない。

普通初めて入る他人の空間は勝手に入ることを躊躇するものだが、なでしこは何も気にせず中に入りキヨロキヨロしながら言った。

俺はよく話す間柄の二人なので、気にせずにそれに続く。

「誰もいないね。今日は休みなのかな？」

「いや、だいたいいつも部室にいるはずなんだけど。グラウンドで焚き火でもしてるのかな？」

グラウンドで焚き火をするのは、野クルの唯一の活動だ。あとはキャンプ雑誌を見るぐらいらしい。正式は部活ではないとはいえ、よくもまあ存続しているな。

「まあ、ちょっとここで待つてようか。それで来なければ後日出直そう」

「うん」

とても素直な返事だった。

俺は棚に腰をかける。バッグから暇潰し用の小説を取り出した。昔は活字なんて見るだけで嫌になっていたが、キャンプをし始めてからは時間潰しにちょうどいいことを知った。

なでしこは棚に入れてあるキャンプ雑誌をペラペラとめくつていた。

そこで何か見つけたのか、なでしこは俺にキャンプ雑誌の誌面を見せてきた。

「ねえ、ここにシユラフ特集つてあるけど、シユラフつてそんなに種類あるの？」

俺は本から目を離し、なでしこを見る。

「そうだね。メーカーによつて色々出てるけど、代表的なのは『レクタングラーモード型』『マミー型（人形型）』『エッグ型（卵型）』『人型』の4つかな」

「へえー！ それってどう違うの！」

「うん。俺もあまり詳しいわけじゃないけど、『レクタングラーモード型』は一番一般的な寝袋だね。漫画なんかでもこれが書かれることが多いから想像しやすいと思うよ。マミーとエッグは使つたことないけど、保温力が高いらしいよ。最後に『人型』だけど、これは保温力は他より低いけど、動きやすいから外の景色見るとき便利だよ。俺が使つてるのは人型のシュラフだしね」

「あく、あの時の宇宙飛行士だね！ ……はつ。じゃあ、リンちゃんと私がそのシュラフを買つたら三人で月面着陸ごっこできるね！」

「あはは、なでしこは面白いこと思い付くな！」

リンは絶対やらないと思うけど。寒いしお金の無駄だからイヤだと言うリンが目に浮かぶ。

「まあ、初心者が買うならレクタングラーモード型がベターだと思うよ。俺は寒いの得意だし、天体観測とか好きだから人型にしたけど、最初はそれだつたし」

まあ、俺の場合リンのおじいさんにいらなくなつたシュラフをもらつたから、自分で選んだわけじゃないけど。

「そうだね……っ!?」

雑誌に目を戻したなでしこは、目を見開かせた。

そして身体を震わせながら再度俺に雑誌を見せてくる。

何だ何だと思い見てみると、なでしこの指はシユラフの値段欄をさしていった。

「さささささ三万五千円!？」

「ちなみにこつちは四万二千円、そつちは五万円だね」

「シユラフってこんなに高いの!? はつ。ということは他のキャンプ道具も……」

「いやいや、これは高級キャンプ道具の特集だからね？ 相場はもつと安いよ。四千円くらいあればそれなりの物買えるし」

「そ、それなら何とか」

「でも、シユラフの他にもテントとか好みによるけど椅子やライト、他にも薪代や宿泊費も込みにすると軽く一萬くらい飛ぶけどね」

「うわあああああああ

なでしこは、頭を抱えてしまつた。

まずい俺は今若いキヤンパーの芽を摘んでしまつたのかもしれない。

学生キヤンパーが少ない理由の1つに資金面の問題が大きい。リンはおじいさんから道具を譲つてもらつてるし、俺もリンのお下がりとか貯まつてたお年玉を使って何

とかしてるので、どこもそうとは限らない。特にこの田舎だと学生が働けるバイトは少ない。わりとではなく、大問題だ。

俺は苦し紛れのフォローをする。

「ま、まあ、でもさ！ 野クルに入ればキャンプ道具もシェアできるし、必ずしも全部必要とは限らないんじやないかなあ！」

「な、なるほど。ゆう君頭いい！」

一瞬で立ち直った。

なでしこが、とてもたんじゅ……素直で助かつた。

額の汗を拭つていると、女子が話す声が外から聞こえてきた。どうやら、ようやく来たらしい。

間もなくして、がらりとドアが開いた。そこには眼鏡をかけた黒髪ツインテールと後ろに八重歯が特徴的な金髪の二人が立っていた。

俺と目が合うと、黒髪ツインテールの方の女子こと大垣千明は眼鏡を光らせた。

「ここで会つたが百年目え！ ついに我が野クルに入部する気になつたか星流ゆう！」

「いや無理無理。俺野球部入つてるし」

「そもそも、うちの学校兼部は禁止やん」

「そういうこと。……まあ、その代わりと言つては何だけど入部希望者連れてきたよ」

入部希望者？ と首を捻る二人に、俺は後ろにいたなでしこを紹介した。

紹介されたなでしこは、緊張からかびしつと身体を正した。

「にゅ、入部希望者の各務原なでしこです！ 精一杯頑張ります」

「えーと。来てもらつて悪いんだけど、ウチ部員募集してないんだよね」

「ゆう君は歓迎してたのに!?」

本当だよ。あれれー？ てつきり部員絶賛募集中だと思つてたんだけど、意外にそうでもなかつた？ なら俺は何であんなにしつこく誘われたのか。大垣さんとフラグを立てた記憶はないんだがね。

「ちよつと、なんで断るんよ？」

断つた大垣さんを、もう一人の部員こと犬山あおいに耳打ちするように聞いた。

「だつて、部室超狭くなるじやん」

「部員増えれば、大きな部室もらえるんやない？」

その言葉に大垣さんの拳動が止まつた。

多分、大きな部室でのびのびと寛いでいる自分を想像しているのだろう。

二人はなおこそ話し合う。

「正式な部活になるのつて、何人必要だつけ？」

「たしか四人以上や」

「私たちは君のような逸材を待っていた！」

一転してなでしこを歓迎し出す大垣さん。

手の平くるつくるだな、おい。

犬山さんも調子がいい大垣さんの姿に苦笑いを浮かべていた。

まあ、歓迎？されてるみたいだし、ノリもあつてるぽいし、俺はお役ごめんかな。

「それじやあ大垣さん、犬山さん。なでしこをよろしくね」

「おう任せろ！」

「もう帰るん？」

「いや、リンの図書委員が終わつてから帰るよ」

「相変わらず仲ええな～」

「それは、おおきに」

ヘタな関西弁でお礼を言つて、三人に手をふりながら俺は野クルの部室を後にした。

図書室に向かう途中の廊下で、ズボンのポケットに入つた携帯がバイブした。

リン『まだ学校にいる？』

ゆう『いるよ』

リン『じゃあ、図書委員の仕事が終わつたら一緒に帰ろう』

『お母さんに買い物してきてつて頼まれてるから』

ゆう『荷物持ちかよ』

リン『あと、お母さんがよかつたら夕飯一緒にどうか? つて』

ゆう『今すぐにでも行こうではないか。四十秒でしくしな!』

リン『仕事終わつたらつて言つてるだろ』

ゆう『仕事と俺、どつちが大事なの!』

リン『仕事』

ゆう『俺の心はひどく傷ついた……ガクツ』

『餓死しました』

リン『はええよ』

ゆう『そんじや、今から行くわ』

リン『うい』

それにしても今日は色々なことがあつたもんだ。

ハルノブをからかつて、クラスメイトに質問攻めにされ、なでしこを世話して、野クルの二人と話して……まあ、楽しかつたちや、楽しかつた。

でも——

俺は無意識のうちにラインにこう打っていた。

『やつぱり、お前と話すのが一番楽しいわ』

この文は送らずに削除した。

麓キャンプ場

時間は昼前だが防寒具が手放せない寒さはいつも通り。解放感たっぷりの広い草原の先には富士山が顔を見せている。

今日の私は麓キャンプ場というところに来ていた。

とても有名なキャンプ場で、ちらりほらりと別キャンパーの姿が確認できた。テントを張り、椅子に腰かける。

ちょうどよく、ポケットに入れていた携帯が振動した。

ゆうからだ。

ゆう『やつはろー！』

リン『もう昼前だ、寝坊助め』

ゆう『本当だよ。もう朝は布団から出れんわあ～……』

『つて、おい！』

『つきここまで試合しどつたわ！　お前も知ってるだろ！』

『メツセージ通り、今日のキャンプにゆうは付いてきていない。

もちろん私は誘つた。しかし、野球部は12月に入ると3月まで対外試合が禁止され

る。そして今日はその期間に入る前の最後の試合らしい。

さすがにそんな大事な日に休めとは言えず（そもそも向こうの予定優先だけど）。そのため、今日の私は正真正銘ソロキャンプとなつた。

ゆう『そつちの景色どう？』

リン『綺麗だよ。冬なのに他のキャンパーもいるし。さすがは有名なだけあるって感じ』

そう送つて私はカメラアプリを使って、草原と富士山の写真を送つた。

ゆう『いい景色だねー』

『でも生の方が綺麗だつたんだろうな。やっぱり俺も行きたかつたわ～』

リン『今から来れば？』

ゆう『午後からもう一試合あるんだよ（T O T）』

『しかも監督最後だから気合い入つてるし』

『多分、完全下校時刻まで帰れそうにない……』

リン『へつ、ざまあ』

ゆう『くあ wせ d r f t g y、ふじこー！ p！』

リン『ふはははは』

ゆう『くつ、この屈辱は絶対に返す。一万倍返しだ！』

リン『多すぎるだろ』

ゆう『ごめん、先輩から呼ばれた。俺もう行くね』

リン『うい』

ゆう『風邪引くなよ』

リン『ゆうもね。試合がんばれ p（ーー）q』

ゆう『サンキュー』

そうして携帯の画面を閉じた。

こうなるとしばらくゆうは連絡とれないだろう。まさか試合中に携帯が弄れるとも思えない。

少し手持ち無沙汰な感じがする。最近ゆうと一緒に行つてばかりだったから、誰もいないことに慣れていないのかもしれない。

何はともあれ、純粹なソロキャンプは久しぶりだ。

今日は楽しむことにしよう。

私は昼ご飯の準備を始めた……って言つても、カツブ麺だからお湯沸かすだけなんだけど。机の上にはカレー味と書かれたヌードルが堂々と鎮座していた。

料理はいつもゆう任せだつたから、今日は自分で作ろうと思つていたのだが、まさか道中でスーパーが一軒もないとは。田舎を甘く見ていた。

まあ、こんなことも経験の1つと思おう。今度から本気出す。
私は、コポコポと麺にお湯を注いだ。



ガコンと取り出し口にドリンクが落ちてくる音が聞こえてきた。

押したボタンにはあつたかくいと赤い印がつけられているが、ひりつくような寒さの中では温めたコンビニのドリアのように手につけたくないくらい熱い。取り出したコーヒーカップを軽くお手玉する。

その様子を隣で笑いながら見ている人がいた。同じ野球部の先輩のヒラカワさんだ。ポジションは投手で、自他共に認めるエースである。

リンとやり取りしている時に、声をかけてきたのはこの人だ。要件は午前中の試合で活躍した褒美に飲み物を奢ることだった。

教育された体育会系が、先輩からの太つ腹な話を断るはずがなく。俺は二つ返事で販機まで付いてきた。

蓋を開くとカシユツと気持ちいい音が聞こえた。

「先輩ごちになりまーす」

「おう飲んどけ飲んどけ。その代わり午後の試合も頼むぜ」

「任せてください。トリプルスリーやってりますよ」

「アホ、何十打席するつもりだ」

オレンジジュースに口を付けながら、軽いチヨップを入れられた。体罰とかでなく、

ただのスキンシップ程度のものなのでつい笑いが出てきた。

「そういやさあ……」

「どうしたんですか？」

先輩が何か言いたげにしていたので、こちらから聞いてみた……のだが、ヒラカワ先

輩は顔を真つ赤にして固まつてしまつた。

まるでメデューサに睨まれ石にされたみたいだ。

視線は俺の後ろを捉えているようだ。

その目線の方に目を向けると。

「ゆう君やん。おはよう。いやもうこんなにちわやつた」

「犬山さん、こんにちわ」

ふわふわとした笑顔を見せていたのは、メデューサなんて恐ろしい存在ではなく、犬山あおい。野クルの部員で、俺の友達である。ああ、だから先輩が石になってしまったのか。

それにしても今日は一般生徒は休みなのだが、犬山さんはなぜいるのだろうか。

「今日はどうしたの？ 野クルの部活？」

「ううん違うで。昨日提出のプリント出すのうつかり忘れてしまったんよ。でも先生が今日中に出せ間に合つたことにしてくれるいうから、さつき出してきたんよ」

「へえ〜」

真面目な犬山さんらしい理由だった。俺だつたら遅れていいからと、絶対に休日に学校来ようとは思わない。

「ゆう君は部活？」

「そだよ。さつきまで試合やつてた」

「勝てたん？」

「俺が決勝打打つて、無事勝利」
イエーイとVサインする。

「へえ、すごいやん」

「いや、それほどでも」

自慢して何だが、素直に褒められると照れ臭い。

軽い雑談をするなか、犬山さんは隣の石像を不思議そうに見た。もちろんこの学校に石像などなく、それはヒラカワ先輩である。

一応紹介した方がいいかな？

「あ、紹介するねこの人は……」

「ヒヒヒヒヒ、ヒラカワでしゅ！ よろしくおねがいしましゅ！」

まるでコミュ障ボツチのように、囁きまくる先輩。

その言動からは、先程相手打線からくるくる三振をとつていた姿はとても想像できなかつた。

まあ、ここまで来ればバレバレな気がするけど、ヒラカワ先輩は犬山さん好きなのである。犬山さんはかわいいし、性格もいい、げすなことを言うと発育もいい。こんな人

に性欲がありあまる男子高校生が憧れないはずがなく、わりとファンが多い。

俺はおっぱいは嫌いじゃないけど、友達に欲情はしないかな。それに、だから犬山さんと友達でいられるんだと思うし。

ヒラカワ先輩の自己紹介を聞いた犬山さんは、面白かったのかクスクスと笑つていた。ここで引き笑いや嘲笑をしないのが、彼女のいいところだろう。

「よろしくやで、ヒラカワ君」

「犬山さん。1個上だよ」

「あ、先輩やつたん。ゆう君と仲がよさそうやつたから、てつきり同級生かと思つたわ。すいませんでした」

「いえいえいえ、まつたく構いません。むしろご褒美です。是非ともヒラカワ君と呼んでください！」

「そ、うなん？ 分かつたわ、ヒラカワ君」

「しゃああああ！」

ヒラカワ君と呼ばれた先輩は、去年の夏大で最後の打者を抑えた時よりも気持ちのこもったガツツポーズをして見せた。喜びがよく伝わった。後輩からはドン引きされていますが。

先輩は、満面の笑みを見せながら俺に言つた。

「ゆう、俺ちょっと300球くらい投げ込んでくるわ」

「やめてください。（先輩の肩が）死んでしまいます」

「俺甲子園で優勝したら、（犬山さんに）告白するんだ」

「完全な死亡フラグじやないですか……。せめてランニングにしてください。投手には
スタミナが重要です」

「分かった。外周100周してくる。……おっしゃああああ！」

と叫びながら、先輩は走つて行つた。

……倒れたら、先生の指示じやなく自主的に行きましたつて証言しないとなあ。じや
ないと先生が責任を問われてしまう。

「面白い人やね、ヒラカワ君」

「いつもはもつとカッコいいんだけどね……」

女子の面白い人は、＝男扱いされていないと聞いたことがある。先輩脈なしつぽいで
す。俺は今頃寒さには耐えながら走つているだろう先輩に静かに手を合わせた。

「そういえば今日は志摩さんと一緒にやないの？」

「いつも一緒にみたいに言わないでよ。リンは今日キャンプ行つてるよ」

「何でゆう君は行つてないんや?」

「誘われたけど、今日試合だから断つた」

「失望しました、ゆう君の友達やめるわ」

「なんでやねん!」

「嘘やで〜」

にこりと言われた。

か、からかわれたのか……。あせつたー、俺どんな失礼なことをしたのかと思つた。

友達の決別宣言つて、すごく傷つくから。

まつたく、からかうのうまいな犬山さん。

はつ。からかい上手な犬山さん……。

閑話休題。

犬山さんは、「1つ聞きたいんやけど」と言い。

「断られた時の志摩さんどんな感じやつた?」

「どんな感じつて?」

「がつかりしてたとか、不貞腐れてたとかなかつたん?」

「まつたく。『そうか。分かつた』って言つてたけど、がつかりも不貞腐れてもしてな

かつたな〜」

「あ〜。志摩さんも志摩さんで問題あるんやな」

犬山さんの言葉に、意味がわからない俺は首をかしげた。

「よく分かんないけど、リンなら大丈夫じゃない? あいつ1人でいる方が好きだし」と言つた俺に、犬山さんはまつたくこいつはと言わんばかりに呆れたようなため息を付いた。

「あのなあゆう君。親しい人間に誘いを断られんのは、少なからずがつくりするもんや。うちだつて、あきに遊びの誘いを断られたらがつかりするわ」「……なるほど、一理ある」

「そうやろ? それにな、志摩さんはたしかに群れるより1人で静かにしてる方が好きかもしけんけど。でもな、1人が好きつて、=1人でも平気なわけやないんやで」

「え? 1人が好きなのに、1人だと嫌なの? どういうこと?」

「んー簡単に言うとな……」

犬山さんは、いたずらつ子ぼく唇に人さし指を当てた
「女の子の心は、色々複雑つてことや」

そう言い残して、犬山さんはバイバイと手をふつて去つていった。

女心ね……。

男の俺には大学受験並みの難問だ。

まあ、要するにリンが寂しがつてることだよな?

俺は携帯を取り出して、ある人にラインを送つた。そのときなぜか、なんでやねんと
つっこむ犬山さんが頭に浮かんできた。



読み終えた本を閉じる。

続いてもう一冊読もうとリュックに手を伸ばしたが、そこで今読んだ本が持つてきた
最後の一冊であると気がついた。

しまつた、もつと持つてきておくべきだつた……と後悔しても後先たたない。

時刻は4時を過ぎた頃。夕御飯を作るにも早すぎるし、そもそも3分ができる（飲み物のためにお湯は沸かしてあるから）。

この辺りの散策もすでに終わっている（写真なんかは、ゆうと斎藤に送った）。

斎藤にメツセージを送つても既読が付かない。まあ、向こうにも都合があるのでしょ
うがない。

仕方がない、私はラジオ放送を聞くことにした。

イヤホンから野党がどうとか与党はだらしないとか、眠くなるようなニュースが流れ
てくる。

こんなときにゆうがいればなんて考えしまう。

たぶん、楽しそうに夕御飯の準備をしながら、私の会話にも神経を注いでくれるだろ
う。

いなくなつて始めて、その重要性に気がつく。
つて、それは失礼か。

部活を優先するなんて当たり前だ。ゆうはチームの中心選手だし、相応の責任もあ
る。キャンプはあくまでプライベート。

はあ、と白い息が漏れた。

そういえば、と不意に先日偶然再会した本栖湖の迷子のことを思い出した。

うちの高校に転校してきたらしい。しかも驚くことにゆうと同じクラス。クラスメ
イトからの目が怖かつたと嘆いていた。

どうやらあのあとからアウトドアに嵌まつたらしく、ゆうの紹介で犬山さんと大垣がやつて いる野クルに入部したらしい。

私も誘われたが、正直ああいうノリは苦手なのですげなく断つてしまつた。露骨にいやがりすぎだと、ゆうからは苦言を呈されてしまつた。

なでしこには悪いことしたなあ。「リンちゃん！」罪悪感からか幻聴が聞こえてきた。「リンちゃん！」

そんな呼ばなくとも分かつたつて。

「やつぱり、リンちゃんだ」

「だから、分かつたつて……ふおお!?」

私は信じられないものをみたような声をあげた。

だつて そ うだろ。

ここにいるはずがない、なでしこが鍋を抱えて立つていたのだから。

「な、何でここに？」

「斎藤さんとゆう君がリンちゃんは今日ここでキャンプしてるつて

「まさかの共犯（グル）!?」

なでしこから見せられた携帯の画面には、しつかりとこの麓キャンプ上のURLが貼

られていた。

あいつらめ……。私は情報漏洩をした二人を恨めしく思う。

「どうやつて来たの？ 南部町から、ここまで40キロくらいあるけど」「お姉ちゃんに車で送つてもらつたんだ！ テントはまだ買つてないから寝るときも車だけど」

「いいと思うよ。キャンピングカーで寝るのも最近流行つてるし。……それで、今日はどうしたの？」

「今日はねあの時のお礼をしに来たんだよ！」

「あの時？ ああ、本栖湖の時の」

「うん。リンちゃんもう『飯食べた？』

「ううん、まだだけど」

「よかつたー！」

手を胸前で合わせるなでしこ。

たぶん文脈と持つてる道具からして……。

「リンちゃん、鍋しよう！」

なでしこは土鍋を見せつけながら、満面の笑みでそう言つた。



餃子鍋を食べ終えて、なでしこは朝に昇るダイヤモンド富士を見るためにお姉さんの車に戻つて寝ている。

私もテントに入つて寝ようと思つたのだが、携帶着信を受けた。

相手はゆうだつた。

ゆう『起きてる?』

リン『寝てる』

ゆう『そうか、じやあおやすみ』

リン『おい』

ゆう『そつちが先に仕掛けてきたんじやん』

そう言わると痛い。

ゆう『つて、そんなくだらない言い合いするために話しかけたんじゃないんだ』
『実はリンに聞きたいことがあるんだ』

リン『聞きたいこと?』

ゆう『うん』

『リンさ、今日のキャンプどうだった?』

何でそんなことを? 私は首をかしげた。

リン『楽しかったよ』

『なでしこが来たのはビックリしたけど、景色もきれいだし鍋もおいしかったし』

ゆう『写真見たよ』

『すぐくおいしそうだった』

リン『うん』

『ピリ辛で餃子もおいしかった』

『でも、勝手に私の居場所チクったのは、まだ許してないからな:—』

ゆう『ごめんごめん』

『俺もどうしようか迷ったけど、意識的に手を動かしたんだ』

リン『確信犯じやねえか』

ゆう『言つただろ。屈辱はかなならず返すと』
リン『お前何キヤラだよ』

ゆう『我が傷害に一変も悔いなし!』
『5時だ』

どつちも違うな。

ゆう『だから違うつて!? 話逸れすぎだよ!』

リン『結局聞きたいことつて何なんだよ』

ゆう『リンさ、俺がいなくて寂しかった?』

は?
私は文の意味が分からず目が点になつた。

リン『何で?』

ゆう『今日学校で犬山さんに会つたとき、リンは俺と一緒にキャンプ行きたかったん
じゃないかつて言われて……』

『つて! ごめん変なこと聞いて! 今のは忘れて!』

て言われても、もう聞いてるし。

私はソロキャンプが好きだ。それは間違いない。でも、今日感じたのは……。

リン『たしかに……ゆうがいなくて、少し物足りなかつた、かも』
文を送ると、数分ほど返信が止まつた。

その間に私はとんでもなく恥ずかしいことを言つてしまつたと絶賛後悔中だつた。
外はマイナス近い気温なのに、寝袋を脱ぎたいぐらい身体が熱い。
そして……。

ゆう『そなんだ』

『今日はごめん。今度から、できるだけ付き合えるようにする』

リン『ありがとう』

ゆう『じやあお休み』

リン『うん、お休み』

そう送つて、私は画面を閉じた。

たぶん、今日は寝れなそうだな……。

(間話) 星流ゆう

月は霜月の終わりに差し掛かる頃。

太陽が昇りきっていない空の下、俺はグラウンドを歩いていた。吐いた息は白く色づく。霜が張った土は踏む度にざくざくという音が聞こえてきた。

後ろを見ると、足跡の窪みには細かな水溜まりがいくつもできていた。その場所を確認するようにそーと踏むとぐにやりと豆腐のような感触だつた。

俺は苦笑いを浮かべる。そして近くでスポンジを持つて構えていたハルノブを見て首をふつた。

「駄目だね。こんなコンディションじゃグラウンドは使えないよ」

「うええ、マジかよ……。整備しても無理?」

ハルノブは上目づかい（キモい）をしながら、スポンジを伸ばし縮みする。

「無理だね。まずグラウンドが凍つてから整備のしようがないよ」

「んが〜! もうだから冬の午前練なんて意味ないって言つてるのによお! どうせ使

えないのに何でグラウンド練習なんて言うんだよ! 監督絶対確信犯だろ!」

「できればラツキーくらいの感覚なんじやない?」

「まつたく朝起きるのも楽じやないんのによお。やだやだ。どうせ今日もトレーニングメニュー中心になるんだろう？ イヤだ、ランニングダリく……」

ハルノブは背中を曲げて心底嫌そうな顔をしていた。よっぽど嫌らしい。

まあ、これが普通の反応なんだと思う。

誰だつて地味でキツいランニングや筋トレは好きじやない。汗かくし、息苦しいし。メジャーリーガーにだつてランニングは苦手という選手がいるほどだ。むしろ好きな方が少数派なんだろう。

「ゆうは嫌じやねえの？」

「別に。俺はどんな練習だろうと全力でこなすだけだと思つてるよ」

「いいね、体力あるやつわ。本当に羨ましい、妬ましい。しかもかわいい彼女もいて、女の子の友達もたくさんいて……爆発しろ」
「おい今ぼそりとなんて言つた？」

「別に何も」

「いや言つただろ」

「言つてない。しつこいぞ」

「そう。……あとリンは彼女じやないから。何回言わせるんだよ」

「俺は志摩さんなんて一言も言つてないけど？」

「うつ」

ハルノブはにやにやとからかうような視線を向けてくる。

「なあなあ、何で志摩さんだと思つたんだよ！」

めんどくさいし、とてもうざい。

俺は誤魔化すようにこほつと小さな咳をした。

「……別に、いつも周りから言われるからそう思つただけだよ」

「ふうん」

ああ～！ このにまにまと口元を緩ませた顔に全力ストレートをぶちこみたい！

いつも弄つてる相手から、こんな反撃を受けるとは思つていなかつた。迂闊な発言は禁物だな。

しかしながらハルノブ。あまり調子に乗るなよ。こちらにはお前を攻める手段はいくらでもあるのだよ。

「ところでハルノブ君。君が最近、お姉さんものから転校生ものに切り替えたというタレコミがあつたんだけど、真偽のほどはどうなんだい？」

「んなつ!? な、なん……ごほんごほん。……し、知らないなあ。何ですかそれ？ 純情

野球少年の僕には分からなあ～」

「ちなみに内容は痴漢されていた転校生（ピンク髪）を主人公が偶然助けてフラグを建て

て、なぜかその後学校案内と称して屋上であれやこれやをしてしまう……むぐつ「わあー！ わあー！ 言うな！ いや、言わないでください！」

ハルノブは顔を真っ赤にして口を塞いできた。

ふふ、慣れないことをするからさ。いやはやお前も青春してるねえ。

まあ、がんばれよ。あの子、色気より食い氣。花より団子を地で行く女の子だから前途多難だろうけど。

このあとハルノブをめちゃくちや弄つた。



練習が終わつた。

今日は本当なら午前グラウンド、午後トレーニングメニューの予定だつたが、知つての通りグラウンドは使用できなかつたため午前中トレーニングだけして終了した。

時間はお昼を少し過ぎたくらい。陽が出ているおかげか、多少寒さはましになつていた。

部室では先輩たちが帰りに昼飯食べて行こうと盛り上がつていた。

俺は汗でびしょびしょになつたアンダーシャツをYシャツに着替え、足を洗うため水

道まで歩く。その途中、ブルペンの方から乾いた皮の音が響いてきた。
何だろうと少し歩いてみると、ヒラカワ先輩がキャッチャーベースを座らせてピッチングをしていた。

先輩は後ろにいる俺の存在に気がついたようだ。俺は頭を下げる。

「お疲れ様です」

「お疲れ。ゆうは……ああ、足を洗いに来たのか」

ヒラカワ先輩は俺の足下を眺めてそう言つた。ソックスを下ろして、タオルを肩にかけていれば分かるか。

「はい。そういう先輩は居残りで練習ですか。熱心ですね」

「おう。俺は甲子園で優勝して犬山さんに告白するつもりだからな！」

「それ本気だつたんですか!?」

「当たり前だろ。俺はやると言つたら本当にやるぞ。だから手始めに1日投げ込み300球だ！」

「やめてください、夏大始まる前に燃え尽きますよ」

「しかしながら、俺が成長しないと甲子園には……」

「先輩」

俺は自分の左肩を掴んで。

「俺みたいになりたいですか？」
「っ！」

先輩は表情を曇らせた。その奥のキヤツチャーをしている先輩もばつの悪い顔になる。

それはそうだろう。昔、肩を壊して投手を諦めた見本が目の前にいるのだから。今は問題なくファーストをやつてるから忘れている人も多いんだけどね。

「投げ込みに熱心にするのはいいんですけど、肩のケアも忘れないでくださいね」

「……すまん、ありがとうございます」

「いえ。それじゃあ失礼します」

頭を下げて俺はその場を後にした。



帰宅中の道路。

「はあ……やつちやつたな〜」

俺は自転車を漕ぎながらひとりごちた。

何を嘆いているのかといえば、先程先輩に言つた言葉だ。

あれはただの八つ当たりだ。気分屋なヒラカワ先輩のことだ、トレーニングで疲れた身体なら100球投げるかどうかのところだろう。なのに偉そうに説教じみたことを言つてしまつた。

理由は分かる。羨ましかつたのだろう。元気に投げ込んでいる先輩が。それなのに軽々しく自分の身体を軽視するような発言をしたもんだから少しむきになつてしまつたのだろう。

自分の狭量ぶりに嫌気がさす。

左肩を擦る。

あれから2年……いや正確には一年半くらいかな。

3年生に上がる直前だつた。俺は肩を壊した。

医者の難しい説明はよく理解できていないけど、要するに俺は2度とマウンドには立てないつてことらしい。『Major』の五郎を想像すると分かりやすいかも知れない。

今でさえ、外野の前進守備だろうがノーバウンド送球は絶対にできない。壊した当初はボールを投げることすらできなかつた。

当時地元の星なんて言われて鼻を高くしていいたクソガキにとつてしてみれば酷い現実だつた。とても落ち込んだ。本気で死を考えたほどだ。

まあ、今は今で楽しいんだけどね。

先輩や同級生と野球して、なでしこや犬山さん大垣さんとゆるく駄弁つて、そしてリンとキャンプして。

そんなことを考えていると、ズボンのポケットに入れていた携帯がバイブした。

俺は自転車を止めて、片足をスタンダード代わりに地面につけた。

画面を確認するとリンからだつた。

リン『練習終つた?』

ゆう『うん。今帰つてるところ』

リン『寒いのに朝から大変だな』

ゆう『いやいや、原付で長野県まで行くリンさんには敵いませんよ』

リン『ふつ(ドヤア)』

今日リンは長野県にあるタカボッチ高原というキャンプ場に行つているらしい。先日できるだけ一緒に行くとは言つたが、さすがに長野は無理ゲー。免許持つてないし。

ゆう『お昼ご飯は食べたの?』

リン『うん。ボルシチ食つた。トテモオイシカツタ』

ゆう『リンがバイ「リン」ガルに!』

リン『寒いし分かりにくい』

片言になつた？外国人？バイリンガルという連想系のオヤジギヤグだつただけど。たしかに分かりにくいいな。

というか君は理解できたのね。

ゆう『まあ、気を付けなよ。長野県には、狸や熊や恐竜がいるんだから。食われないようにな』

リン『いや恐竜はいないだろ』

ゆう『長野県民には草でも食わせておけ！』

リン『お前長野にどんな恨みがあるんだよ』

ネタは通じなかつた。

ゆう『本当に気を付けるんだよ？ けがしないようにな』

リン『うい。ありがとう。おみやげ買つてくれ』

ゆう『おみやげは松本城でいいよ』

リン『でけえよ。どうやつて持つて帰るんだよ』

ゆう『仕方ない、上田城で我慢しよう』

リン『適当に買うわ』

俺はガーンというスタンプを送つた。

リンからは呆れた表情のスタンプが送られてきた。

くすりと頬が緩む。

こうしたいいつも通りの平和なやり取りが心を癒してくれる。

こうやつてリンが側にいてくれたから俺は……。

空を見上げる。寒空には太陽が堂々と輝いていた。

もやりん

それはとある日の放課後のこと。期末試験が近づき教室の空気は心なしか張りつめていた。

それはそうだろう。この本栖高校では期末試験で赤点をとつた場合冬休み中補習を受けさせられる。

高校生の冬休みとは、友達とわいわいクリスマスパーティーをやつたり、彼女と駅前のイルミネーションを見に行つたりと青春の一ページを彩るための重大なイベントなのだ。というのが、ハルノブ談である。

24、25日共に練習があるのを忘れているのだろうか。俺たち野球部に普通の青春が送れるはずがないのにな。

少しばかり話が逸れたが、要するに期末試験を失敗したものは高校生活の2分の1を無駄にするらしい。そんな大袈裟な。

まあでも、冬休みだろうが平日だろうが補習なんて絶対にごめんだけど。

そんなわけで勉強をするために図書室にでも行こうと鞄を持つと、「ゆうくーん！」という特徴的な鳴き声のピンク髪の生物に突進された。

某殺人タツクルのよう背後から突然の衝撃に、俺は「うげっ」と呻き声をあげた少しよろめいた。それでも、なんとかふんばり女の子に押し倒されるなんてベタベタなラブコメ展開は免れた。野球部でよかつた。

俺は猪突猛進系女子の顔を見て言つた。

「どうしたのなでしこ？」

俺の問いかける。まあ、なでしこが元気なのはいつものことだし。今日は特別元気だが、それもリンからおみやげをもらつたから機嫌がいいんだろう（俺は松本城のキー ホルダーもらつた）。

リアルカ○ビイーこと各務原なでしこは、目を輝かせながら。
「ゆう君、一緒にキャンプ行こう！」

とんでもない爆弾を落としてきた。



考えてみてほしい。

つきあつていらない男女が夜遅い中、一晩同じ場所ですごす。それは想像力豊かな高校生の脳内にさまざまな妄想を掻き立てさせる。

もちろん寝床なんてテントを二つ建てれば別になるし、キャンプに行つたからといって間違いが必ず起きるわけではない。ソースは俺とリン。

しかし、他人にとつてはそんな事情があろうがなかろうが関係ない。

要は疑惑があればいいのだ。例えば所帯持ちの芸能人が女性と一緒にあるいていれば、実際何もやましいことはなくとも世間は不倫だと認識する。同じく男と女が一緒に遊びに行けばどうなるか、火を見るより明らかだ。

しかも俺はなぜかリンと深い仲だという認識が広まっている。さらになでしこは転校生で姿もいいからそこそこ校内でも有名人。結果、周りはざわつく。

違う、誤解なんです！ と全力で叫びたい。

だが、なでしこに抱きつかれているこの状況でそんなことすれば、オフホワイトの疑いは、ダークグレーに深まるだろう。人間の心って難しいし、面倒くさい。

不幸中の幸いなのは、放課後ということでクラスの人は半分くらいしかいないことだろう。特になでしこに密かに心引かれる変態紳士たちがいないことは大きい。おそらく彼らがいれば、俺は体育館裏に連れ込まれ想像したくないくらい酷い目にあつていただろう。まあ、明日の朝には広まっているんだろうけど。明日休もうかな（遠い目）。

「ねえ、ゆう君！ キャンプ行こう！ 焼肉キャンプ！」

そして現在俺を針のむしろ状態にしている元凶は、自覚なしに俺を誘い続けていた。

君が純粋なのは知っているけど、もう少し恥じらいを持とうね。

俺はなでしこの肩を押して少し距離をとる。

「なでしこ落ち着いて。急にどうしたの？ 焼肉キャンプ？」

「リンちゃんがね焼肉するための機材買つたの！ こんな風に賽銭箱みたいな形のやつ！」

「リンが？ ……ああ」

そういうえば前にAmazonで注文したと言つてたな。

これで私も料理するんじゃ！ って意気込んでたつけ。リンも料理するようになつたんだ。失敗した黒焦げ目玉焼きを食わされたのが懐かしいよ。

「だからねリンちゃんとキヤンプ行こうって話になつたの！ それで私が、それならゆう君も誘つていい？」 つて聞いたら

「ゆうがいいつて言うならいいよ、でしょ？」

「うええええ！ 何で分かつたの!? エスペー！」

「いかにもリンが言いそうな台詞だからね。10年以上付き合いがあれば、そのくらい分かるさ」

俺の言葉になでしこはへえーと感心した様子だつた。

「でも、何で俺も誘おうと思つたん? 男がいるより、女の子二人の方が気兼ねなく楽しめるんじゃない?」

「そうなの? 私はゆう君もいた方が絶対楽しいとおもうよ?」

「お、おう」

ちょっとだけドキッとしてしまつた。

純粹で真っ直ぐな好意(友人としてだろうけど)つて、こんなに嬉しいんだな。

「それには、私ゆう君にお礼したいと思つて」

「お礼?」

「うん。本栖湖の時ほうとう食べさせてもらつたことか、それと転校した後も野クルに紹介してくれたり、教科書見せてもらつたりお世話になりっぱなしだから! 少しでも恩返ししたいんだ!」

「恩返しなんて……大袈裟だなあ」

そう思うと俺となでしこの関係つて、少女漫画みたいだよな。危ないところで助けて、転校してきたら偶然同じクラスで、色々関わりを持つて。違うところは男の方がイケメンじゃないところ……つてやかましいわ!

……まあ、リンも一緒みたいだし、試験休み期間だから部活もない。行こうか。

「いいよ。俺も行くよ、焼肉キャンプ」

「やつたー！ リンちゃんとゆう君と一緒に焼肉キャンプだあ！」

「予定なんかは後日ラインで確認しよう」

「うん分かつた！ ……やつきにくキャンプ！ やつきにくキャンプ！」

楽しそうに鼻唄を歌っているなでしこを教室に残して、俺は教室を逃げるよう後に後ろにした。……明日学校行くのこわいなあ。



図書室に来た。

いつもはがらがらな図書室なのだが、今日はテストが近いということで、それなりに席が埋っていた。これがピークになるとお前の席ねえからレベルに混む。

受付の方を見ると、いつも通りリンが本を読みながら、斎藤さんの髪遊び相手になつていた（ほぼ一方的だけどね）。

俺がそちらに歩くと、途中で斎藤さんが笑顔を向けてきた。それに遅れてリンも無表情のまま手を挙げてきた。

「ゆう君、やつほー」

「よう」

「斎藤さん、やつほゝ。ついでにリンにはデスビーム！」

「殺意剥き出しじやねえか」

「ぐはあ！　こ、ここまでかあ……」

「いや斎藤、お前が死ぬのかよ」

「さありん覚醒するんだ。斎藤のことかあああああ！　つて」

「いやだよ。というか、ここ図書室なんだから静かにしろ」

「リンが私のために怒つてくれない……」

「くつ、リンブラツクめ。なんて冷徹なんだ」

「ノリノリかよ。お前ら仲良しだな」

リンは心底呆れた様子だつた。

俺と斎藤さんは、グツとポーズでお互いを讚え合う。

ちよつとリンのいつもお団子のところが、イーブイの尻尾みたいになつてているのを見たらドラゴンボールを思い出してしまつた。というか、その髪型どうやってんの？　気になつたけど、どうせ理解できないからいいや。坊主頭の高校生に髪遊びなんてできないし。

「そういえばゆう。なでしこから話は聞いた？」

「うん。焼肉キャンプでしょ？　練習ないから行けるつてか言つておいたよ」

「へえ、なになに。今度はゆう君もなでしこちゃんとキャンプ行くの？」

「そうだよ。クラスメイトの目の前でね……」

「ああ、なでしこらしいね」

リンは同情してくれた。俺のトーンが下がつたのを見て、何があつたのか大体察したのだろう。

「あはは、大変だね！」

斎藤さんも察したうえで、他人事な言葉だつた。彼女らしいと言えば、彼女らしい。まあ、酷い目と言つても実力行使には出ないと思うし。多分、メイビー。

「それで今回はどこのキャンプ場に行くつもりなの？ また本栖湖？」

「ううん。今回はなでしこがキャンプ場探すんだって」

「なでしこが？ へえ、張り切つてるな！」

恩返しというのは過言ではないらしい。

これは俺も美味しいもの用意してあげようかな。

「リンは何時に帰る？」

「図書室閉めるのと同じ。だから、6時ぐらい」

「おつけく。じゃあ、待つてから終わつたら一緒に帰ろう」

「分かつた」

さて、補習にならないようにテスト勉強でもしようか。

俺は空いてる席を探す。受付から離れた奥の方の席が開いていたので、そつちの方に向かつた。



「相変わらずお熱いね」「一人とも」

「からかうなよ斎藤……」

私がからかうように言うと、リンはうざそうに顔をしかめながら言つた。

照れてるのかな？」

でも、流れるように一緒に帰る約束取り付けているのに、今さら照れるほどのことはない気がするけど。

「でも私驚いたよ。なでしこちゃんってキャンプに誘えるくらいゆう君と仲良かつたんだね」

「まあ、同じクラスだし。休み時間とかもけつこう一緒にいるらしいよ」

「……二人で？」

「知らん」

興味は無さそうな口調だつた。

リンはやきもちとか焼かないのかな？ 親しい男の子が知らないところで女の子と仲良くなつてたら、普通少しは気にするとと思うんだけど……。

ちよつと聞いてみよう。

「リンは気にならないの？」

「何が？」

「ゆう君となでしこちゃんの関係」

「??」

リンは私が何を言つているのか本気で分かつていない様子だつた。

私は戦慄した。

私は勘違いをしていたのかもしれない。この二人が進展しない原因は、肝心なところでへたれるゆう君だと思つてた。でも、実はリンの常軌を逸した鈍感が原因なのではないか。

ゆう君は本人は自覚してないけど、けつこう女の子に人気がある。野球部で中心選手で顔も特別悪いわけではなく、明るいし、ノリもいい。言い方は悪いけど、なかなかの優良物件だ。無理もない。

それでもこれまで動きがないのは、リンとの仲に入り込めないとみんなが諦めたから

だ。それもいつ崩れるか分からぬ。どこかでころつと他の人に持つてかれてしまうかも知れないのだ。

「もしかしたら付き合つちゃうかもよ、ゆう君となでしこちゃん」

「またそういう話か……」

「あり得ないことじやないでしょ。いいの？ 二人がくつづいても？」

「私にどうこう言える権利はないし」

「ふーん。リンは受け入れちゃうんだ。ゆう君がリンを優先しなくなつても」「……いいだろ別に。誰と付き合うかなんてゆうが決める事だし。私トイレ行つてくれるから、受付やつておいてくれ」

リンはそそくさと逃げ出してしまつた。

どこか釈然としないまま、私は先程リンが座つていた席に座つた。頬杖をつく。はあ、今度のキャンプで少しは進展してるといいんだけどなあ。



つい図書室から逃げ出してしまつた。

斎藤が前々から私を焚き付けようとするのは分かつていたが、今日は迫力が違った。
どこか怒りにも似た何かを感じた。

でも、いきなりゆうがなでしこと付き合うなんて言われても、私に文句を言う権利なん
て……？

なぜだろう。なんだか胸がもやつとする。

「風邪でもひいたのか？」

私は特に気にせずに時間を潰した。